・巴里の思出・

黒田鵬心

"Bonbon" の第七号おもしろく拝見しました、殊に表紙は一九二九年の一夏を共に巴里で過した古城江観君の筆で一層なつかしく拝見しました。本文も村岡花子さんや石黒敬七旦那や後藤末雄君や薩摩治郎八氏や皆知った方々で興味を深くしました、そうして私も一文を艸する気になったのです。

『巴里の思い出』と云うのは、私の選集第九巻として去る昭和卅一年三月に出版した本の名である。夫には私が「巴里日本美術展」の為に一九二九年六月に巴里で開かれた個展の事を始めとして春から秋へかけての私の日記やら何やらを集めてある。パリは僅かに半年足らずの滞在で、その間にロンドンへ行ったり、白、蘭の旅へ出たりしたので正味は甚だ少いのであるが、仏人のアパートに寓して比較的日本人間の交渉が少なかったので、少い時間の割にはパリの裏面の色々な方面を味う事が出来た。小さくて甘い料理屋にもつれて行って貰ったり、土産ものを買うにも、百貨店へ行くのは田舎ものだなど笑われて小さな専門店へ案内されたりした。勿論ルーヴルへ十数回通ったのを始め美術館は端から見て廻った。

丁度藤田嗣治君がもはや名を成していたので、そのアトリエも数回訪れ「巴里日本美術展」の目録のカットを描いて貰ったり、会場のジュ・ド・ボーウム入口の看版を描いて貰ったり、又会期中開催した茶会の招待状の色刷カットも揮毫して貰ったり、又一緒にレストランやカフェへも行った。

藤田君とは其後同君が帰朝して暫く日本へ滞在していた際も時にアトリエをたづね、又パリ会で一緒にもなった。現夫人はたしかパリ会が縁になったのだと覚えている。

その藤田君はつい先日新宿伊勢丹で個展を催し、一九二〇年頃の作から今年の小品に至るまで約百三十点を出陳し、老いて益々壮な意気を見せた。会場で最近の肖像写真を見ると、大分老けて来たが私と同年の筈だから七十六才である。彼は日本が生んだ現代の洋画家として世界的に名を成

した男である。「巴里日本美術展」にも大作を出したが、招待日に来た大統領も彼と握手して彼の画の前に立った。夜など一緒に散歩していると、知らないフランス人が「フジタ」とさゝやいているのを幾度も聞いた事がある。日本大使の名を知らなくても彼の名と彼のオカッパ頭は知っているのである。

私は十年間「仏蘭西現代美術展」を日本で開催する仕事をやっていたので、一九二九年に滞仏中は数々の画家をアトリエに訪問して同年秋日本へ送るべき作品を選んで廻った。ヴァン・ドンゲンやシャルル・グランやアンリ・マルタンなどもその中に居た、又ラリックやドームの硝子陳列所で品物を選び、シャン・ゼリゼー通りの新しい工芸店で家具なども選んだ。大低は一緒に日仏芸術展をやっていたエルマン・デルスニス君か同君の義弟のフルマン君が一緒に行って呉れた。若い画家で日本で個展をやりたいと云うのがあって、その作品も数十点選んだ。

又巴里にはペルシヤ古美術の専門店があって、そこでは陶器や裂地や少数の木工家具を選んだ。その木工の衝立の一つは帰朝後小絲源太郎君に望まれて同君に譲り、早速同君はそれを背景として花の絵を描き、それは今回の松屋の「自選展」にも出品されている。

ヴァン・ドンゲンの大きなアトリエには二度訪ね、秋の日本の展覧会のポスターも描いて貰った。髯の濃いこわいような老人だったが、中々親切で多くの絵も出品され、その中の一点は今京橋のブリッジストン美術館に陳列されている。

巴里の思出は書けばまだ〳〵つきないが、最後に一寸パリ会のことを書いて置こう。私がパリから帰ったのは十月であったが、間もなく武藤仁叟が訪ねて来られ、パリに遊んだもので会合を開こうと云う事になり、出来たのがパリ会である。多分昭和五年の春から毎月開く事になり、毎月十四日と決めたのは私の発議によるものだが、それは無論七月十四日(カトルズ・ジュイエ)に因んだので今も続けられて居り、今年十二月は満三十年のお祝の大会を開くそうである。武藤君は万年幹事で佐藤尚武氏も初めからの会長である。それにつけても始めの頃幹事として世話した川路柳虹、田辺孝次、矢沢弦月の三君が早く逝去されたのは悼しい事である。

(一九六〇・一一・一四・東京家政大学教授)